

氏名	肖 <sup>しょう</sup> 江 <sup>こう</sup> 楽 <sup>らく</sup>
学位の種類	博士(文学)
報告番号	甲第470号
学位授与年月日	2018年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日 文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	『英和对訳袖珍辞書』の研究
審査委員	(主査) 沖森 卓也(立教大学大学院文学研究科教授) 加藤 睦(立教大学大学院文学研究科教授) 木村 一(東洋大学文学部教授)

## I. 論文の内容の要旨

### (1) 論文の構成

序章 近代日本初の本格的な英和辞書—『英和对訳袖珍辞書』

第1章 原稿から刊行へ

第2章 初版の刊行

第3章 再版原稿から刊行へ

第4章 初版と再版との比較

第5章 第3版—『改正増補和訳英辞書』

第6章 第4版—『大正増補和訳英辞林』

第7章 『英和对訳袖珍辞書』の周辺資料 (1) —ロプシャイト『英華字典』

第8章 『英和对訳袖珍辞書』の周辺資料 (2) —メドハースト『英和和英語彙集』

終章 研究回顧と課題

### (2) 論文の内容要旨

序章では、『英和对訳袖珍辞書』の紹介及び中国から伝来した英華字典の影響について整理する。第1章では、初版原稿資料の紹介・解説及び先行研究を踏まえながら、初版におけるメドハースト『英華字典』の利用方法を検討する。第2章では、現存する初版を通して辞書の遍歴を辿り、天理大学図書館所蔵『英和对訳袖珍辞書』初版の書き込みにも注目する。また、訳語がどのように生まれたのか、そしてどのように定着していったのか、さらに国語辞典にいつ登録されたのかを、訳語「眼球」を取り上げ具体的に考察する。第3章では、再版原稿資料の解説を踏まえ、どの資料を参看して、どのような見出し語が増補されたのか、そして、どのような訳語が新たに与えられたのかという考察を通して、近代日本英学の発展の一端を解明する。第4章では、初版と再版との比較を行い、独自に作成したデータベースに基づき、改版がどのように行われていったのかを詳細に調査する。また、メドハースト『英華字典』の持ち主堀達之助が、再版に携わっていたのか否かについても考察する。第5章では、第3版に関わる人物及び辞書自体の特徴を分析する。そして、新しく増補された見出し語の訳語の性格がどのように変化していったのかを分析する。第6章では、新たな辞書の増補語を中心とし、「英和辞書」「和英辞書」及び「英華字典」などの辞書間における相互の影響関係を論じる。第7章では、初版を所蔵した宣教師ロプシャイトが、その訳語を参看した可能性があるか否かについて検討を加える。第8章では、メドハースト『英和和英語彙集』の種本について探求し、近代日中語彙交流史について考察する。終章では、本論文によって明らかになったことをまとめ、今後解明すべき課題を明記する。

## II. 論文審査の結果の要旨

### (1) 論文の特徴

本論文は、『英和対訳袖珍辞書』の初版から第3版までの、見出し語や訳語の異同を詳しく分析し、各版の成立をめぐる諸問題について総合的に考察を加えたものである。この辞書に関する先行研究はこれまで数多く見られるが、それらに論拠として用いられるデータは部分的に抽出されたものであって、全体を隈なく見渡すという手法を採ることはなかった。しかし、本論文は初版と再版、そして、再版原稿と再版との間で見出し語や訳語が異なる項目についてすべてデータベース化した上での分析に基づくものであることから、例示に基づく印象批評ではなく、極めて実証性に富む、質の高い論考となっている。ある訳語の成立をめぐる個別的な課題はもちろんのこと、近代新漢語の語彙という幅広い論点についても実証的に究明が加えられたのも、その独自のデータを駆使できたからに他ならない。また、メドハーストやロプシャイトの編集による『英華字典』との関係にも力点をおくことで、近代漢語の成立をめぐる日中の語彙交流をダイナミックに解明している点も大きな特徴と言える。

### (2) 論文の評価

『英和対訳袖珍辞書』はピカード『英蘭蘭英対訳字典』に基づき、さらに蘭和辞書から訳語を取り入れていったもので、メドハースト『英華字典』との継承関係は1%程度と考えられていたが、徹底的な資料調査によって、全体では約3%、およそ1530語にのぼり、その影響は決して少なくないことを明らかにしえた意義は大きい。また、再版において、辞書の見出し語の総数の四分一(約7979語)が何らかの改訂が加えられたこと、改訂の割合が最も高い項目(V)と、最も低い項目(B)との間では30%以上の差が見られることなどを解明して、改訂に携わった者とその担当部分を推定し、さらに初版の編者堀達之助が改訂に参加した可能性にも言及するとともに、再版におけるメドハースト『英華字典』の利用に加えて、『ウェブスター辞書』を参照したことを具体的に論述したことも注目される。再版の改訂作業が訳語のレベルアップだけでなく、後の英和辞書に大きな影響を与え、さらには日本英学史の発展に果たした役割の大きさを明快に述べた点も有意義である。第3版において訳語がより具体的な事象を表すという質的な変化を遂げる点にも総合的かつ具体的に考察を加えたことなど、新たな知見が得られた一方で、訳語の読みや片仮名表記など考察の及んでいない面があることも否めない。しかし、それらは訳語の形成過程や対訳辞書の史的発達について考察を一層深めていくことによって今後克服されよう。本論文は初の本格的英和辞典の訳語を総合的かつ網羅的に考察し、各版の意義を分析して、その全貌を明らかにした労作として高く評価できる。